

卒業論文・卒業研究の要旨

論文題目	現代日本におけるマイクロアグレッションの構造-「悪意なき加害」と「同調圧力」がもたらす被害の不可視化-
氏名	前野日向子
メジャー	日本研究
マイナー	哲学
<p>(要旨)</p> <p>本研究は、多様化が進む現代日本の大学生のコミュニケーションにおいて、露骨な差別とは異なる「悪意なき加害」としての「マイクロアグレッション」の実態と、その発生・構造を明らかにするものである。まず、マイクロアグレッションの概念や分類について文献調査を行った。次に、日本の大学生におけるマイクロアグレッションの認識と実態を把握するため、大学生 49 名を対象にアンケート調査を実施し、用語の認知度や被害経験の有無、被害に直面した際の心理的反応と行動を、その時の感情や関係性など多角的に分析した。</p> <p>調査の結果、用語の認知度は 2 割未満と著しく低い一方、具体的な事例を提示すると過半数が被害を経験しているという認識と実態の大きな乖離が明らかになった。被害の内容は、人種やルーツに関するもの(例：日本語お上手ですね)に加え、ジェンダー規範の押し付け(例：女の子なんだから～)など多岐にわたり、マイノリティのみならず、マジョリティ属性も含めた学生全体に及んでいる傾向が見られた。特に注目されるのは、被害を受けた多くの学生が、その場での抗議や指摘を行わず、沈黙を選択している点である。その背景には、「相手に悪意がない」「場の空気を壊したくない」という心理的抑制が強く働いている。また、心理的反応として、怒りよりも諦めが上回っている事実は、微細な攻撃が日常的に繰り返され、無力感が生まれていることを示唆している。</p> <p>以上の分析から、本研究は、日本社会特有の同調圧力と加害者の悪意なき行動が相互に作用し、被害を個人の内面に封じ込め、構造的に不可視化させている現状を浮き彫りにした。今後は、無自覚であった加害者が自身の偏見を自覚し、行動を変容させるプロセスの解明が求められる。</p> <p>(指導教員の推薦のコメント) 本論文は、現代日本社会において見過ごされがちなマイクロアグレッションの実態を、日本の大学生を対象とした独自調査に基づいて明らかにした意欲的な研究である。海外理論の整理にとどまらず、身近な学生生活の場面に焦点を当て、具体的な言動や心理的反応を丁寧に分析している点が高く評価できる。特に重要なのは、用語の認知度が低いにもかかわらず、過半数の学生が該当する経験を有していることを示し、被害の不可視化構造を実証した点である。また、被害が特定のマイノリティに限定されるのではなく、多数派基準や同調圧力といった日本社会特有の規範の中で広く生じている可能性を指摘した点も、本研究の独自性である。さらに、被害後の「沈黙」や「諦め」といった心理、第三者の対応まで分析を広げ、問題を個人の感受性ではなく社会的構造の問題として位置づけている。理論理解、調査設計、分析、考察のいずれも高い水準に達しており、本論文を優秀卒業論文として推薦できる。</p>	